

〈法身〉の二種について

ルーベン・アビト

大乘仏教の中心概念の一つである〈法身〉(dhamakaya)は複雑な展開の過程を経たものと見られる。諸経論において〈法身〉の語には二種の顕著な用法を指摘することができる。それは例えば次の成唯識論第十の箇所において示されるのである。

大覺世尊成^①就無上寂默法^②故名^③大牟尼。此牟尼尊所得^④二果永離^⑤二障^⑥亦名^⑦法身。無量無辺力無畏等大功徳法所^⑧莊嚴^⑨故。(中略)
如是法身有^⑩三^⑪相別^⑫。一自性身。謂諸如來眞淨法界。(中略)即此自性身亦名^⑬法身。大功徳法所依止故。二受用身。(中略)三變化身。』(大正三十一・五七下)。①

すなわち、一方では、煩惱・所知の二障を断つて無量無辺の功徳②を獲得して如來の境地に到達したものを法身と呼ぶが、他方ではその如來法身を三身に分けて、その中の第一を法界と等しい自性身と呼びながらこれをも法身と名づけるのである。前者はいわば〈法身〉の總括的用法に対して、後者はその個別的用法であるといえる。③

本稿においてこの二種の用法の背景及びその意義を検討してみたい。

さて、〈法身〉は如來の説明語(adihvaca)としてパーリ仏典或いは般若經典に例を見出すが、そこで〈法を身体とするもの〉という意味が示される。④

ところで〈法〉(dharma)のとりえかたによつて〈法身〉のニュアンスが異なるといえよう。例えば、如來を〈法を身体とするもの〉と呼ぶことは、如來をその悟られた真理、またはその説かれた教法に等しいものと見なす立場に基づいているといえる。なお、大乘においては dharma は空性(śūnyatā)として説かれ、これはさらに展開して、法性(dharmatā)・眞如(tathatā)・諸法実相(catvarya lakṣaṇa, dharmāṅgīn dharmatā)、または法界(dharmadhātu)の諸概念と結びついて説かれるようになるのである。⑤

他方では覺者がその悟りに結びつく徳性(dharma)を獲得したという意味において如來を〈法を身体とするもの〉とよ

ぶこともある。アビダルマにおいては、如来のありかたを戒・定・慧・解脱・解脱知見という五種の徳性によつて説明する五分法身觀がこの関連で指摘されるが、さらに覺者のもつ不共法 (avenika-buddhadharma) を背景にして《法身》のニュアンスをうかがうことができる。⑥

要するに dharma の豊富な意味内容の中から、一方では真理または教法、他方では徳性というニュアンスが法身の背景にあり、時に区別され、時にからみあつて見られるのである。

これらのニュアンスのからみあいと区別を示すものとして大智度論があげられる。智度論はいくつかの箇所において二身説に言及しているが、これらに関する解釈上の問題を残している。⑦要するに、二身説のうちの第一身を説明するに當つて、ある場合はそれを法性と同視し、またある場合は《覺者の諸徳性を有するもの》として説明しているのである。⑧三身説はおそらくこのような二種の二身説が残した整理の問題に促されて成立したものと考えられよう。すなわち、第一身を法性と見なす二身説と、それを《無量の功德を有する、超人格的仏陀》と見なす二身説を総合的にまとめる必要性から三身説が成立したと推測することができよう。

実際、三身説の一つの典型をあらわした大乘莊嚴經論 (Mahāyānasūtrālaṅkāra) は第一身を法界に等しいものとし、他の

二身の依止 (āśraya) と説くが、第二身を、この淨法界を悟り、覺者としての諸功德を獲得するものとするのである。そして第三身は衆生の教化のためにあらわれる歴史上の仏陀として説かれる。⑨

莊嚴經論は三身の中の第一身を自性身と呼び、法身とも名づけるが、以上見た成唯識論の個別的用法はこの伝統を受けているといえよう。⑩

莊嚴經論より少し遅れて成立したと思われる宝性論 (Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra) は莊嚴經論の影響を受けながら相違点を示す三身説をあらわしているが、主なる相違点は法身のとらえかたにあるといえよう。宝性論における多数の法身の用法の中で二種が目立ち、一つは一切衆生に滲透する如来性 (tathāgatadhātu) の同義的用法であり、もう一つは煩惱所知障を断つてあらわになった如来そのものの同義的用法である。後者は完全なる覺者として智慧と大悲を根本となし、無量無辺の徳性 (guṇa || dharma) を有し、不可思議なはたらき (kriyā) を發揮するものと説かれる。さらに、この如来そのものの、または如来法身は、三身というありかた (virtu) を示し、自利成就と利他成就の二種の機能 (karma || function) によつてこのように三身に分けられると説かれる。⑪この如来法身は遍一切の如来性の完成であり、如来・法身の他に第一義諦・涅槃という説明語によつて述べられ

《法身》の二種について (R・アヒト)

る。⑫この完成された境地においては悟る対象としての真理、すなわち第一義諦は、悟る側(覺者、如来)と不二であるとして解せられる。なお、以上の成唯識論の法身の總括的用法はかの宝性論の如来法身と軌を一にしているといえよう。

要するに、《法身》には二種の目立った用法があり、一つは三身の中の第一身をさす、浄法界と同視される個別的用法であり、⑬他は三身を含めた如来そのものの、覺者性(buddha-iva)をさす總括的用法である。後者は宝性論において宣揚され、前者は大乗莊嚴經論の所説、特にその仏身論の基盤となっている概念として宣揚される。この二論書を背景にして成唯識論は同じ箇所において二種の用法の区別に注目していると思われる。

なお、法身概念の展開、さらに仏身論の展開の研究に課せられる種々の問題が残るが、以上見た法身の二種の用法の区別はそれらの問題を追究するための一つの手がかりにもなるであろう。

1 唯識三十頌の第三十に対する釈文。

2 仏功德については種々の伝統があるが、かの仏功德(buddha-dharma)が悟りの智慧を基盤とすることは明らかである。河村孝照著、『有部の仏陀論』(山喜房、昭和五十年)三〇—三四一、また、高崎直道、『amuktaihaの語義について』『印仏研』巻六、一九五八年、一八六一—一九〇、参照。

3 天野宏英、『ハリバドラの仏身論』『宗教研究』卷三七、一九六四年、二七七一—三〇七はこの二種を指摘している。(二七九頁)
4 D. N. III, 84, は有名な箇所。般若經典には例えば R. Mitra, ed., *Aṣṭaśāstrīka-Prajñāpāramitā*, Calcutta: Bibliotheca Indica, 1888, pp. 94: 10-13, 98: 22-99: 2, 338: 22-339: 1, 461: 22-462: 1, 513: 15-16 (順次に大正八、601c, 602c, 643c, 664b, 674a) 、『また』 E. Conze, ed. *Vajracchedikā Prajñāpāramitā*, Roma: Is MEO, 1957, pp. 56-57 (大正八、752b) 等があげられる。

5 中村元、『華嚴經の思想的意義』、中村元編、『華嚴思想』(法藏館、昭和四七年)八一—一四四、また J. Takasaki, "Dharmatā, Dharmadhātu, Dharmakāya and Buddhadhātu—Structure of the Ultimate Value in Mahāyāna Buddhism," 『印仏研』卷十四、一九六六年、九一九—九〇三、参照。

6 高崎直道著、『如来蔵思想の形成』(春秋社、一九七四年)七六三—七七七参照。

7 宇井伯壽、『大智度論における法身説』『印度哲学研究』第四(岩波書店、一九六五年)、四〇—一四二四参照。

8 例えば、大正二五、27a, 747a, 等と比較して 121c-122b, 236a, 278a 参照。

9 Sylvain Levi, ed., *Mahāvastuśāstrāntika*, Tome I [texte] (Paris: Librairie Honore Champion, 1907), pp. 45-46、莊嚴經論の仏身論には解釈上の問題が残るといわなければならない。これは主として受用身(sambhogika-kāya)と呼ばれる第二身

の理解をめぐる問題であり、別な検討を要するが、成唯識論はこの問題に対して自受用身と他受用身の区別をあらわしている。(大正三十、57c.)

- 10 成唯識論はこの第一身を〈大功徳法所依止〉と説き、莊嚴經論の *āśraya* としての法身を受けついでいると見られる。これによつて法身は智慧に基づいた諸功徳を離れていないということが強調されるが、しかしこれは功徳の所依止であり、その獲得は第二身の受用身にあてはめられるのである。

- 11 E. H. Johnston, ed., *Ratnagotravibhāga Mahāvairocana-treāsāstra* (Patna: Bihar Research Society, 1950)° この論書の第二章は菩提 (bodhi) を主題にして、如来法身の総合的ありかたを説き、第三章はその功徳、第四章はそのたらきを述べる。

- 12 Johnston text, RGV, pp. 55:1-56:6.

- 13 この個別的用法と宝性論の〈如来性〉の同義語としての法身とが *dhātu* (性・界) として軌を一にしていると言えるが、後者は一切衆生に遍満し滲透していると強調され、この点で大乗莊嚴經論が説く〈浄法界〉と相違点を示す。なお、唯識説の *dhātu* と如来藏説の *dhātu* の相違点について、高崎直道、「転依-*āśraya-parivṛtti* と *āśraya-parāvṛtti*」『日本仏教学協会年報』巻二十五、一九五九年、八九—一〇参照。世親著の『法華論』には三身の中の第一身は如来藏として説かれ、〈如来性〉と同義的に見られる。この点はさらに検討を要するといわなければならぬ。

〔法身〕の二種につづて (R・アビト)

執筆者紹介(四)

- | | |
|--------|------------------|
| 竹村 牧男 | (宗化庁宗務課専門職員) |
| 利根川 浩行 | (大正大学総合仏教研究所研究員) |
| 林 善信 | (仏教大学助手) |
| 鶴見 良道 | (中京女子大学講師) |
| 春日 礼智 | (元大谷大学教授・文博) |
| 金子 寛哉 | (大正大学講師) |
| 江隈 薫 | (函館大谷短期大学助教授) |
| 沖本 克己 | (花園大学講師) |
| 増田 英男 | (明治薬科大学教授) |
| 池田 魯参 | (駒沢大学講師) |
| 石附 勝龍 | (駒沢大学助教授) |
| 岩松 浅夫 | (東京大学大学院) |
| 永井 政之 | (駒沢大学大学院修了) |
| 長谷部 幽蹊 | (爱知学院大学教授) |
| 石井 修道 | (駒沢大学講師) |
| 椎名 宏雄 | (駒沢大学講師) |
| 吉田 道興 | (駒沢大学大学院修了) |
| 鄭 学権 | (東京大学研究生) |

(二四七頁につづく)